

「羽包み(はくくみ)」

第13号 平成27年8月15日発行

自立援助ホーム「湘南つばさの家」

〒253-0022 神奈川県茅ヶ崎市松浪 1-12-17

TEL・FAX 0467-58-6260 shonan-tsubasa@marble.ocn.ne.jp

〔郵便局での振込みは〕 ゆうちょ銀行 振替口座 00200-5-81277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

〔銀行からの振込みは〕 ゆうちょ銀行 店名：029 当座 0081277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

殻を破る

ホーム長 前川 礼彦

生まれてからの育ちの中で、人は人生の脚本を描くと言います。

人への接し方、物事の見方、人生観、幼少時から青年期にかけて一度創った脚本は、理性ではどうにもならない領域の中で、自動反応を繰り返します。

毎回同じ様な人間関係、身近な人になるほど表れる対人関係の傾向。許せないこと、越えられないこと。毎回分かっているのに繰り返してしまうこと。

自らが創り上げた自分自身の生き方や性格は、年齢を重ねるにつれ付き合っていかなければならないが、心の中では「現状を変えたい」という思いが、時折自身にささやいているのではないか。「このままじゃいけない」「自分を変えたい」「より良い暮らし(社会)を創っていきたい」・・・そんな思いが原動力になり、行動に繋がることもある。

自ら創ってきた脚本は、時と場所と人を変え、同じ様なことを繰り返してきた。

臆病な自分は、創ってきた殻の中にいることで安心し、殻の外にある新しい世界に飛び込むことを恐れて生きてきた。手に汗握っておじけづいたとしても、勇気を持って飛び込むことが出来たら、自身が更に成長出来るはずなのに。

つばさの家を作ったときは、そうだった。「絶対作る。俺がやるんだ。」先が見えない不安で一杯だとしても、勇気を持って飛び込んだから今があるのだ。

人は死ぬまで成長する。何歳になっても変わることができる。本気になれば生き直す事も出来る。今まで許せなかったこと、踏み出せなかったことが、勇気を持って行動に移したら、長年の悩みから解放されることもある。課題や苦労はあるかもしれない。でも殻を破ったとき、必ず感じるであろう。新たな世界で得たものは、今までの自分では感じることも出来なかった新たな幸せや輝きなのである。

生きていくなかで引き寄せるチャンスがある。自身の殻を破って取り組むか、今までの生き方と同じようにやり過ごすか。「本当にそれで良いのか」と心に問いかける。

自らの人生を後悔のない様に、真の一步を踏み出す生き方をしていきたいと思うのです。

今後とも湘南つばさの家を宜しくお願い致します。



つばさの家応援団 ～支援者紹介（その9）～

ご紹介する相原さんは、私に大きな示唆を与えて下さった方でした。ホームの運営のために沢山の方をご紹介して頂き、苦しいときには物心ともに継続的な支援をして下さったり、いつも明るい雰囲気で見守って下さいました。どれだけ救われたか分かりません。

「この様な人になりたい」と思わせる素敵な方です。いつも感謝しています。

ギバーであること

相原 清

約 20 年間の新聞記者生活のうち、かなりの年月をエジプトやイラクなどの中東地域で過ごしました。深い印象を受けたのが、神に生贄を捧げて感謝した故事にちなむ「犠牲祭」。人々は、買った羊肉の三分の一を家族で食し、三分の一は友人や親戚に分けます。そして、残りの三分の一は貧しい人々に分け与えるのです。裕福な人はもちろん、貧しい人は、自分より更に貧しい人へと。

そこに息づく精神は、全員が与える側、ギバー(Giver) であるということです。奪うだけのテイカー (Taker) はいません。

もちろん、こうした精神は中東を越え、人の世にあまねく存在するものでしょう。日本語の「お一つどうぞ」「お裾分け」は、ギバーであることを象徴する言葉です。

物質的にモノを与えるだけが、ギバーではありません。赤ちゃんは、何も私たちにくれないけれど、無垢の表情で和ませてくれます。私は現在、故郷・平塚に帰り、介護施設を経営していますが、寝たきりに近いおじいちゃん、おばあちゃんの「ありがとう」の一言や笑顔が、スタッフの心を満たしてくれるのです。

つばさの家で暮らす皆さんへ。

もしかしたら、皆さんの中には、過去の家庭環境を恨み、現在の境遇を嘆き、未来に希望を見いだせないでいるかもしれない。自分なんか生きている意味がない、と思うことがあるかもしれない。

もちろん、人には、なすべき使命があります。しかし、それ以前に、皆さんがこの社会にいること自体が、周りのだれかとの関係性を生み、その人々に幸せや幸せの種を与えているのです。

皆さんも、この文章の読者も、私も、人はみなギバーです。そして、ギバーは巡り巡って自らが幸せの享受者になります。

「生きてりゃ、必ずいいことあるよ」。 中東のテロと戦争で、昨日まで元気だった友人たちが突然世を去る悲劇を目の当たりにしてきた私からのメッセージです。





あすなるサポートステーション開所！！

昨年度、児童養護施設などを退所した青年の自立生活相談所「あすなるサポートステーション」を開設しました。

つばさの家は6名定員ですが、神奈川県域（指定都市を除く地域）の施設から就労自立をする青年は年間約50名います。施設では「アフターケア」と称して、退所した青年の地域生活支援を行います。人員も制度も整っていない状況でも何とか支えようと奮闘されています。



あすなるサポートステーションは、施設を退所した青年たちの自立を支えるため、また施設のアフターケアを支えるため、神奈川県の委託を受けて活動を開始しました。

具体的には①施設を退所した青年がアパート暮らしなど自活した生活を継続するための「社会生活定着支援」、②施設を退所するまでに自立の力を身につける自立支援研修など「社会生活移行支援」、③施設職員の「アフターケア支援」などを柱に活動します。日々の雑談から就職相談まで、青年たちが孤立しないで、繋がり続けていることを何よりも大切にします。

施設を出て誰かの支えがなければ、失敗したときにやり直しも出来ず、生活が転落してしまうこともあります。あすなるサポートステーションでは、その様な青年たちに寄り添っていきながら、彼らの自立を見守っていければと思います。

ゆくゆくは施設で暮らす青年だけではなく、家庭で暮らしていても居場所のない地域の青年たちにも、支援の幅を広げていきます。



ステーションは辻堂駅西口から徒歩1分。マンションの一室に事務所を構えています。

室内は訪問する青年の居場所にもなる「リビング」、個別の相談に応じる「面接室」、週末は夕食を囲む「ダイニング」など、ゆったり落ち着いた空間になっています。スタッフは2名。以下に紹介します。

福本啓介（常勤スタッフ：あすなるマネージャー）

今年度よりあすなるサポートステーションに配属されました。つばさの家ホーム長の前川さんがこれまで培ってきた、青年たちの自立をサポートするための知恵や経験を少しでも吸収して、ステーションを訪れる子どもたちの支援に役立てていきたいと思っています。以前は学校、児童心理治療施設などで勤務。様々な養育環境の中でメンタルに不安を抱えた子どもや、発達に偏りのある子どもの支援を行ってきました。

赤尾さゆり（非常勤スタッフ）

二宮にある児童養護施設「心泉学園」で働き、10年目となります。男子寮でケアワーカーをしてきたのですが、キャリアアップを考え、出向であすなるのお手伝いをする事になりました。あすなるでアフターケアの仕事をする中で、今まで分からなかった施設退所後の児童が置かれている現状が見えてきました。またニュースなどで目にする児童相談所に届かないケースについても考えるようになりました。福祉の仕事をする中で視野を広げ、情報を集める中で自分のキャリアアップも追求していきたいと考えています。



スタッフの声

今回はつばさの家を中心的に支えている知子さんからの寄稿です。朝から晩まで毎日働き、いつも明るく、温かい雰囲気です。少年達と接してくれています。当時の原点を忘れず、新たな日々を積み重ねています。

「あれから9年・・・」

つばさの家も9年目に入りました。引っ越してきたその日、東京から来た私は1駅歩くのは容易いものだと思い、藤沢駅から辻堂まで1人で歩いたのを思い出します。忘れもしない10月の終わり。引越費用を安くしようと荷物は夕方から夜の到着。私自身も暗くなってからホームに着きました。暗い中、ブレーカーの場所も分からず心細く感じたのを思い出します。

12月25日に1人目が入居するまで、本当に始められるのだろうかと思いながらの日々でした。1人目の子は距離を取るのが難しい子で、常に前川か私が本人と過ごすという、気が抜けるのは彼がトイレに行く時と寝ている時だけ。朝になり2階で物音がするとドキッとして緊張が走る・・・そんな3人での生活でした。「死」と書いたメモを置かれたり、人形の首を切ったり、自分の要求を通そうと出口を塞いで交渉をしてきたり、つい先ほどまで穏やかだったのに、たった一言で豹変する彼に次第に追い詰められていきました。そんな時にスタッフがもう1人増え、ボランティアさんも来るようになりました。どれだけ助けられたか・・・。煮詰まる空間の中に1人入るだけで、空気が全く変わります。人の存在の大きさを感じました。

最初の3年は余裕もなく、ひたすら駆け抜けたような気がしています。覚悟を決めて始めたはずなのに葛藤する日々でした。共に暮らすということは、どこかに行ってもどんな気分でも、ここに帰って来なければいけない。ドアを開けるのが重く感じる事も多々ありました。

それでも今こうしてここに自分がいるのは何故だろうと、ふと思えます。居心地が良いかと聞かれたら微妙だと答える気がします。それでも色々な感情が詰まった場所で、私が望む人間らしく生きられる場所だと思うから、ここにいるのだと思います。

ここ数年は多くの方に助けられてきたと実感します。正直、つばさの家としてはありがたいかも、とても忙しくさせて頂きました。この忙しさから感情的にも余裕がない日々が多かった様な気がします。今年は10年目になります。今まで支えて下さった方に恩返しができるよう何か出来たらいいなと思っています。

少しの支えと人の存在があって何とか生きていける・・・彼らに関わらず誰もがそうなのかなと思ったりします。つばさの家を開設しなければ出逢わなかった方々が多くいらっしゃいます。その出逢いだけでも、始めた意味はあると思っています。少年たちを含め、出逢いのすべてに感謝です。(前川知子)



「霞台青年寮を再び！！」

今から約60年前、当時の養護施設では子どもたちは中学卒業で退所し、就職自立をしなければなりません。しかし職は得難く、通勤も困難であることから、神奈川県は全国先駆けて、施設退所後のアフターケア施設「霞台青年寮」を開設しました。職場を開拓し、一定期間の住まいと児童の自立促進を図る機能に力を入れました。後に「自立援助ホームの源流」と言われる歴史的な施設です。時代の流れで高度経済成長期に差し掛かり、就職口も増え、霞台青年寮は25年の歳月で役目を終えたのですが、更に時は流れ、現在の社会的養護では多様化する子ども達の「自立」が益々困難を抱えて、自立の年齢も年々上がっていく様になりました。

一般家庭において、大学や専門学校などに進学する割合は8割弱と言われますが、親元から通ったり、アパートで自活しても仕送りや何らかの援助を受けている青年が多い状況です。近年児童養護施設では大学進学にも力を入れ、国も大学進学率を上げる試みを検討していますが、施設で暮らした青年にとって大学等進学は2割強の割合、狭き門なのです。理由は卒業まで保障する学費の問題、合わせて学業を修めながら働いてアパート暮らしを維持しなければならない為です。

学費を稼ぎ、アパート代や生活費を稼ぎ、自活を維持しなければならない。進学をしない場合でも、施設を退所して親元を頼れず就労自立を維持するのは極めて困難なことです。せめて住居を保障し、生活のあらゆる問題に対し、身近に相談できる現代版の「霞台青年寮」が必要になってきたのです。

近年児童養護施設では施設退所後の支援（アフターケア）に改めて力を入れてきました。施設を退所した青年たちが、その後の支援がないことで、若年ホームレスや生活保護、司法に係るケースが増え、虐待や貧困の世代間連鎖のリスクが高くなる状況があるからです。自立援助ホームはまさしくその様な青年たちと接してきた中で、20歳で成人になっても支援の継続が必要であることを日々の実践から実感してきました。虐待などで幼少時に抱えた心の傷は未成年で完結する程甘いものではありません。自信が持てず対人関係が不得手であったり、社会経験の不足から職場が求める水準に付いていけず転職を繰り返したり、初めてのアパート暮らしで実体験する数々の出来事。社会人一年生として失敗しても当然なのであるが、失敗して学びを得る社会の仕組みが保障されていない。

社会的養護を受けた子どもたちの支援は20歳になったからとは言え、年齢で区切れるものではありません。ゆるやかな自立支援が必要あり、現在の子どもの発達課題から「青年期の支援」はこれから益々必要性を増していくことでしょう。

私はかねてより「青年期の支援」の必要性を痛感しており、20歳になっても必要な支援を受けられる集合住宅型のステップハウス（青年期版自立援助ホーム）の開設を目指しています。施設を退所し大学進学を目指す青年なら卒業まで保障出来る支援、20歳を超えても自立につまづいたとき、中期的にやり直せる場を保障する支援、将来的ではあるが、今日明日住まいがなくなった青年の緊急避難が出来るシェルター、それらは2階に半独立的な単身住居を備え、1階には世話人（管理人）が居て皆が集えるリビングで食卓を囲むことも出来、相談も受けられる空間を提供する。夢を語るような話ですが、青年たちの声から「ゆるやかな繋がり」の中、自立の力を育み、失敗してもやり直しながら、豊かな社会人として成長していく、そんな環境を作っていきたいのです。（前川）

支援の継続をお願いします!

皆様からのご支援にて、現在まで何とか運営を維持してまいりました。厚く御礼申し上げます。今後もホームを維持し、自立を目指す少年たちを支えていくためには、皆様からのご支援の継続が欠かせません。ご支援を下さる方は当支援会の会員（無料）として、今後もつばさの家の活動報告をさせていただきます。

物品のご支援

ホーム開設後から大変助かっているのは、食品に関するご支援です。お陰様でお米はとても充実してまいりました。季節の食品をお送り頂く事も多く、旬の物を食卓に出すと会話も広がります。

最近野菜が高く、定期的に頂けるととても助かります。疲れて帰ってくる子は果物も喜びます。お菓子やジュース等も楽しみにします。調味料ではサラダ油、バター、マヨネーズ、小麦粉、パン粉、片栗粉、コンソメ、鶏がらスープの素が特に重宝し、みそ、ドレッシング、醤油、料理酒、砂糖、塩、めんつゆなども継続的に必要です。最近の朝ご飯は白米派とパン派に分かれます。ご飯の場合、ふりかけや海苔、納豆があると喜びます。パンの場合はベーコン、ハム等があると助かります。牛乳、ヨーグルト、ヤクルト等も毎日出しています。またアパート暮らしをしているOB達に食品の支給は大変喜ばれます。十代での1人暮らしはかなり大変です。保存できる食材（缶詰、レトルト等）があると助かります。

また「食料品を定期的に送って下さる方」を募集しています。定期的に食料品や生活用品が届くことは非常に助かるのです。

生活用品では食器用洗剤、洗濯洗剤、石鹸、ラップ、ホイル、ペーパータオル、トイレットペーパー、タオル、切手などの消耗品がありがたいです。その他も大歓迎です。彼らの暮らしが楽しくなる様な品々。お勧め映画（DVD、ダビングしたものも可）、ゲームソフト、マンガ、雑誌、文具、おもちゃ、楽器やスポーツ用品などがあると嬉しいです。定期的にフリーマーケット等にも出店しておりますので、バザー用品も助かります。

緊急支援！！ 経済的なご支援

前述した「あすなろサポートステーション」は自立援助ホームより経済的に厳しい運営です。

現在赤字運営でのスタートで年400万円を集めなければなりません。足らざる部分を皆さまのご寄付で維持継続させて頂けたら幸いです。我々も最大限努力を致しますが、皆さまのお力添えをどうか宜しくお願いいたします。企業スポンサーや助成金のご紹介、定期送金も大歓迎です。

（送金先は表紙記載の口座です。寄付控除の領収書も発行できます。）

編集後記

あすなろサポートステーション開設と、つばさの家の運営で私自身が回らなく通信も1年半のブランクが空いてしまいました。発行を楽しみにして下さった方々には深くお詫び申し上げます。あすなろサポートステーションは新スタッフのお陰で随分活動が活発になってきました。Facebook、ホームページも公開中です。皆さまどうかサポーターになって頂けましたら幸いです。

（前川）